

第七世界強国は「英米」ではなく「神の王国」でなければならない理由

ダニエル書では2章の巨像の実体は、「王国」、そして7章では、獣は「王」また「王国」と表現しています。

(ダニエル 2:39 - 40) …「あなたの後に、あなたに劣る別の王国(מְלָכָוּ מַלְכוּת)が起こります。次いで別の王国(מְלָכָוּ מַלְכוּת) , 三番目の、銅のものが起こり、それが全地を支配します。そして、四番目の王国(מְלָכָוּ מַלְכוּת) ですが、それは鉄のように強いものとなります。鉄は他のすべての物を打ち砕いたりひき砕いたりしますから、物を粉碎する鉄のように、これもそれらのすべてを打ち砕いて粉碎します。」

(ダニエル 7:17) …「これらの巨大な獣について言えば、それは四つであるゆえに、地から立ち上がる四人の王(מְלָכָוּ מַלְכוּת) がいる」…

(ダニエル 7:23) …「第四の獣について言えば、地に生じる四番目の王国(מְלָכָוּ מַלְכוּת) がある。それは他のすべての王国(מְלָכָוּ מַלְכוּת) とは異なっているであろう。」…

これらの表現からダニエル書の「王国」と「王」は同義語として捉えていることが分かります。ユダヤに影響を及ぼす、人間製の世界強国に関して、黙示録17章では、一貫して「王」と表現されています。

(啓示 17:10) …「そして七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今おり、他の一人はまだ到来していない。しかし到来したなら、少しの間とどまらなければならない」…

では、ダニエル書と黙示録の両方を併せて考慮する場合でも、「王国」と「王」は完全同義語なのでしょうか。

ダニエルの預言の「王国」は、強国の興亡を描いているので、順次、前のものを打ち負かして次の王国が台頭してくるものであり、その総数を明らかにしているものですから、黙示録の「王」を「王国」置き換えることも可であるなら、7人の王は7つの「王国」であるということになります。ヨハネが黙示録を記した時、ローマは4番目(最後)の「王国」であり、同時に6人目の「王」(すでに倒れた5人、エジプト/アッシリア/バビロニア/メディア・ペルシャ/ギリシャ、そして「今いる」ローマ)であり、「後に到来する他のひとり」(第7番目の王)が後に控えた「王国」であったなら「王国」に関するダニエルの2章、7章の預言では、4つではなく5つとしているはずです。

しかし、ダニエル書の2つの別々の預言はいずれも「4つ」であるとしているゆえに、ローマ以降の「王国」は存在せず、黙示録の「王」は単純に「王国」と置き換えることはできない記述であることが分かります。

黙示録は7人目の王に関して、「他の一人はまだ到来していない。到来したなら、少しの間とどる」（啓示 17:10）と述べているだけで、それ以外の詳細は何ら触れていません。

そして、この7人目が「ローマの領域から出る国の一つ」などとも述べてはいません。

7人目の条件を満たすのはただ、ヨハネの時代に、「まだ」であり「他のひとり」であるということだけです。そして、それは、神の王国に道を譲ることになるゆえに、人間による世界支配のラストランナー、つまり「アンカー」であるということです。

そして、存在期間は「少しの間」であり、「他のひとり」は7人の王の最後のひとりであり、時期的に「主の日」である終末期に存在するものだとすることが確認できます。

さらに、ここにダニエル書の預言を加味して考慮すると、4番目の獣から（後に）起こり立つ10人の王、また鉄の足に粘土が混ざるようになるという描写から、4番目のローマという王国から起こる、「10人の王」また「粘土」と表現されるものこそ、この「7人目の王」の実体を表すものであらうと考えられます。

これらの表現は4つ目の王国の末期に生じる「変化」であり、別の王国に交代するのではないことを示唆しています。

いずれにしても、元ローマ帝国の領域から起こったとしても、全く別の「王国」であるなら、第4番目ではなく、第5番目の王国になります。それは、元ペルシャ帝国の領域から出たギリシャが第2番目を継承したのではなく第3番目であり、元ギリシャ帝国の領域から出たローマが第3番目ではなく第4番目だったように、どんな領域から出ようが、ローマ以外の異なった王国は、第4番目の王国ではありえません。

第4を継続する者か、第5番目のとなるかは、単にどの領域から出るかだけで、自動的に特定されるものではない事が分かります。

従って「世界強国」と表現するなら、それは、第4番目が最後であり、エジプトから数えるなら第6番目のローマまでしか存在せず、仮にそれを「第6世界強国」と表現するなら、第7番目の「世界強国」はキリストの治める「神の王国」であるというのが、聖書の示すところです。

「王」は7人いるが、「王国」は全部で6つしかない聖書は明言しているからです。

どれほどの勢力を持ち、どの時代に世界のTOPの座にしようと、聖書預言の成就としての最後の7人目の者は、「ローマの王」でなくてはならないのです。

つまり7人目の王は、第6世界強国の王であるということです。

ダニエル書の「王国」と黙示録の「王」は完全同義語ではないことは明白です。

以上のことから、「英米」に限らず、政治諸国家のどれが「第7世界強国」なのかという発想そのものが、聖書から甚だしく逸脱した発想であり、致命的であると断言せざるを得ません。

ダニエル書の「王国」と黙示録の「王」の関係図

ダニエル書の4つの王国		黙示録の7人の王		第一世界強国
		エジプト	第1の王	第二世界強国
アッシリア		第2の王		
1番目	金	 <p>バビロニア</p>	 <p>バビロニア</p>	第3の王 第三世界強国
2番目	銀	 <p>メディア・ペルシャ</p>	 <p>メディア・ペルシャ</p>	第4の王 第四世界強国
3番目	銅	 <p>ギリシャ</p>	 <p>ギリシャ</p>	第5の王 第五世界強国
4番目	鉄	 <p>ローマ</p>	 <p>ローマ</p>	第6の王 第六世界強国
			?	第7の王
神の王国				第七世界強国